OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Ｄ・Ｈ・ロレンスのキーイメージとテキスト ： 「関係性」の視点で
Author(s)	鈴木, 俊次
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49439
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【59】

氏名	鈴木俊次（すずきしゅんじ）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第　２２４０８　号
学位授与年月日	平成20年８月４日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文名	Ｄ・Ｈ・ロレンスのキーイメージとテキストー「関係性」の視点でー
論文審査委員	（主査） 教授　玉井　暲 （副査） 教授　服部　典之　　准教授　片渕　悦久

論文内容の要旨

本論文は、イギリス２０世紀前期の小説家であるＤ・Ｈ・ロレンス（１８８５－１９３０）を取り上げ、その主要小説・詩作品を対象にして、ロレンス文学におけるキーイメージと考えられるものを幾つか選び出し、その観点から、「楽園神話」のモチーフや自然・宇宙との「有機的関係性」にもとづいて成立しているロレンス文学の固有の特質を解明しようとした研究である。論文全体は、序論、第一部から第四部を構成する１５の章、結論と、参考文献・注から構成されており、総頁Ａ４判で２８３頁、４００字詰め原稿用紙に換算して約８５０枚からなる論文である。

本論文は、「序論」において、Ｄ・Ｈ・ロレンスは何よりも「男（アダム）と女（イヴ）」の「関係」と、「人と宇宙（コスモス）」との「関係」を重視した作家であることを述べたあと、個々の作品においてこのロレンス文学の中核的なテーマがいかに展開しているかを明らかにしていく目的について説明をする。

第一部では、『虹』、『恋する女たち』、『白孔雀』、『チャタレィ夫人の恋人』などの代表小説と詩作品を取り上げ、アダムとイヴの関係に収斂される「楽園神話」のモチーフが個々の文学空間において表象されるありようを探り、これに合わせて、このモチーフと、ロレンス作品に頻出する海（水）、太陽、月、大地（地下）、森、馬、蛇などの「自然」に関わるイメージとが密接に関係し合っている現実を明らかにしている。

第二部は、ロレンス文学を、男女の愛の悲劇を圧倒的な自然との関わりの中で描いたトマス・ハーディと比較することにおいて、ロレンスの基本的テーマを多面的に検証している。両作家には、パストラルという文学的伝統を活用し、田舎と都会の価値観に収斂されるヒーローとヒロインとの愛（エロス）の葛藤を描く背後に「楽園神話」の神話構造が見て取れることを指摘する。ロレンスは、先輩作家ハーディの初期小説から『テス』『日陰者ジュード』などの後期小説まで貫かれている楽園表象のモチーフを学んだ上で、みずから、初期の『白孔雀』から『虹』にかけては「楽園喪失」を描き、最後の小説『チャタレィ夫人の恋人』では「楽園復活」「楽園回帰」を果たそうとしたのだと主張する。さらに、ロレンス自身の批評的著作「トマス・ハーディ研究」を詳細に検証し、このハーディ論とロレンス自身の創作作品との間の密接な関係を、『ジュード』と『息子と恋人』『虹』との比較的分析を通して明らかにする。また、「ダーウィニズム」、「不倫（アダルタリィ）」といった重要な文学的テーマをめぐり、両者の小説作品を比較検討することにより、自然との関係および男女間の関係における根源的問題性について深い考察を加えている。

第三部は、「本文校訂」の視点から、幾つかのテキスト版の間の異同を比較検討することにより、ロレンス小説の隠された側面に光を当てようとしたものである。ケンブリッジ版『息子と恋人』（１９２２）と従来の版との比較により、オリジナル原稿版のもつ重要性、特に主人公をめぐる解釈に関わってくる面を明らかにする。また『狐』の３つの版を検討し、最終部の変容によってオープン・エンディングとなっている意味を考察する。

第四部は、ロレンスと彼の周辺にいた同時代作家たちとの文学的関係、およびロレンス文学と２０世紀後半になって現れた新しい批評理論との関係を探ることにより、ロレンス文学をモダニズムおよびポストモダニズムの視点から読み直す可能性について考察している。これにより、ロレンス文学が、Ｅ・Ｍ・フォースター、ヴァージニア・ウルフらのモダニスト小説家、哲学者バートランド・ラッセル、現代批評理論家ジャック・デリダとの関わりにおいて、さらには第１次世界大戦というコンテクストにおいて検証・考察されることになり、新しいロレンス像が描き出される。

最後に、論者は、ロレンスが人間と宇宙との関係性が喪失されたことによって現代の大きな悲劇が生じたと考えていたのだと見て取り、この危機意識により、中期以降のロレンス文学には「楽園神話」「アポカリプティックなヴィジョン」が濃厚になっていると結論づけて論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、２０世紀前期のイギリス文学を代表するＤ・Ｈ・ロレンスを取り上げ、『白孔雀』『息子と恋人』『虹』『恋する女たち』『チャタレィ夫人の恋人』などの主要な小説作品、詩作品、さらには「トマス・ハーディ論」などの批評的作品をも含めた重要な著作に分析と考察を加えることにより、ロレンス文学の全貌を明らかにしようとした極めて意欲的かつ本格的な文学研究論文である。個々の文学テキストの読みを重視する本研究は、作家自身の思想性の追究に偏重する従来のロレンス研究の不備を補うものであり、新鮮な文学的衝撃を与える注目のロレンス論である。ロレンスが自然・世界・宇宙との間にかつては存在していた「関係性」に対して深い喪失感を抱いていた事実、この現代的意識がロレンス文学では楽園神話というモチーフとなって現れているありよう、さらには、この危機意識が個々の文学作品においては楽園喪失、楽園回復、黙示録的ヴィジョンとなって表象されるに至る文学空間の現実を、ロレンスのそれぞれの文学テキストを綿密に読み解くという行為により、説得的に明らかにした功績は高く評価されねばならない。そして、ロレンスの文学世界を彩る動物、植物、太陽と月、地と水を中心とする四大元素などにまつわる豊かなイメージ群のもつ意味を、楽園神話とのコンテクストにおいて捉えることに見事に成功し、個々の小説空間、物語空間、詩的世界におけるこれらのイメージの展開を丁寧に追跡する分析は、ロレンス文学の豊穣性を改めて確認する営みに結びついている。

本論文が、ロレンス文学のもつ意味をトマス・ハーディとの比較研究において明らかにした功績も高く評価されねばならない。この角度からの研究により、ロレンスにおける楽園回復・回帰の動機、ダーウィニズム、アダルタリィ・姦通文学などの問題が一層深く解明されたことは、ロレンス研究のみならずハーディ研究にとっても大きな貢献である。さらに、ロレンスを取り巻く第１次世界大戦前後の広範な文学的・思想的文脈を視野の中に取り入れた論考は、ロレンス文学の大きな可能性を示唆する研究となっている。

ただし、本論文において問題点がないわけではない。論者が提起する「関係性」についての輪郭描写あるいはこの理念･概念が設定される次元やその型･種類についての考察が、やや不鮮明・説明不足になる部分があるのは惜しまれるところである。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。